



リフォームで見つけた暮らし方々々



— 随 想 —

三井のリフォーム 住生活研究所 所長 西田 恭子

どこで暮らすかということと、どんな家を持つということは全く同じなのだろうか？住宅リフォームの仕事をして30年ほど続け、多くの家問題に接するうちにそこでの生活を垣間見ることができた。また講演や取材で各地を訪れ、街の魅力に浸ることも多いのだが生活そのものはどこでも同じだと思ふ時と、この土地ならではのなと思うことがある。

日帰り出張にも楽しみが

特に東京を起点にしている私にとって新幹線でも日帰りできる地域に関心は高く、そのひとつに軽井沢がある。もっと家族が集えるような家にとのご要望で増築リフォームに携わっていたことがあるからだ。新幹線に乗ってしまえば一時間程なので、いつも日帰りだった。土地柄として工事期間は夏の避暑地は作業禁止となり、通っていた頃はいつも駅に降り立つと寒い！と思う季節だが、避暑地としての利用ばかりではなく永住スタイルに変える人もいて、軽井沢は年々人口が増えた数少ない地域ではないだろうか。

地元住民向けの町内放送が流れ、町のお祭りがあるというので行くと、やぎやうさぎが迎えてくれた。百円の大きな綿あめを楽しみ、さらにボランティアの方に初めてバイオリン演奏体験もさせてもらった。浅間山をバックに耳元で響く音色が初めての体験者にも驚くほど心地いい。上からこつんこつんと物が落ち、見上げてみると栗がはじけて落ちていた。早速持ち帰り美味しくいただいたものだ。

東京生まれ東京育ちの私には、盆暮れ帰る田舎がない。団塊ジュニア世代のほぼ半数が三大首都圏生まれといわれ、田舎を持たない若者は大勢いるのだがここでは大都会では体験できないものが手に入るのではないだろうか？国の施策としての定住自立圏構想も進められ、若者の中には入社せず仕事ができる地域として、2地域居住を考える方も出てきた。もともとの田舎がなくても生活の一部に大

地と自然を取り入れる工夫ができそうな土地であることが軽井沢人気を作り出しているのだろう。

また京都府から市民講座として講演会の依頼を受けた時も日帰りだった。

「中古住宅+リノベーションで発見！リノベーションで実現する私の住まい」が指定のタイトルだった。事前打ち合わせに京都へ向かい、京都駅までの新幹線内で駅弁を持ち込み昼食を済ませ、帰日も品川までの新幹線内で夕食の駅弁を食した。そんな何とも忙しい一日ではあったが、京都でも日帰り出張が可能だ。

リフォーム市場の活性化はもちろんのことだが、中古住宅流通業と連携したリフォームが重要な役割を持ってきた今、東京などから別宅として京都の中古住宅を購入しリフォームされる方がいる。京都の不動産事情はプチバブルのように、高額で取引されている地域や、中古マンションも新築時より高額で流通していることもあるということで、やはりご当地ならではの業態が成立していそう。

日帰り出張にも関わらず、戻ると「何を食べてきたんですか。どこをみてきたんですか？」と、どうやら京都というだけでも「うらやましい！」という憧れに近い響きがある土地柄らしい。

こうして各地の良さを認識すると、一回しかない人生において住む場所を一か所に決めてしまうことが何とももったいなく思ってしまう。



拾った栗

トカイナカ暮らし

どうすれば色々な土地で、観光ではなく「住まう」ということが可能なのだろうか？

リフォーム事例取材の中で今年から東京の自宅と湘南での「トカイナカ」暮らしを実行した人がいた。その方は「最終章の生活をどうするかは、地方から出てきた者にとっては常に頭をよぎるものです」とおっしゃる。

この方は上京して早40年。自分でも、なぜそこまで故郷を引きずるのかわからないまま、望郷の思いを捨てられないようだ。奥様は東京育ちで、人生で一度も東京を離れたことがなくご主人の田舎で暮らすなど考えも及ばない。それは東京で生まれ育った子供たちもしかりで、ましてやご本人もまだまだ仕事がらみで東京を離れることは難しい状況だ。

出した結論が「仕事と都会暮らしのベースをマンションで、そして中古住宅でも湘南の戸建てで暮らす」です。なぜ湘南なのか？とお聞きすると、「ぶらぶら歩いて行くと海岸に出ることができ、私の育った町とよく似ている。そしてお魚がおいしい！さらにここからでも都心の仕事場に通える。の三点からです。」と。郷里に帰るわけにもいかず悶々としていたご主人は本当にうれしらしく、二言目には「昔住んでいたところに感じが似ている。」とつぶやいている。この場合は新築ではなく中古購入とリフォームで実現していた。「トカイナカ」暮らしとは、都会的な利便性や文化を併せ持ち、別荘やセカンドハウスを持つのとは違い、「生活の場」であるところが特長的だ。

リタイヤ後の暮らしには、子供の近くに住む選択枝もある。新築に拘らず中古の経済的メリットを念頭に、片や狭くても子供のそばに近居、隣居。もう一方では故郷を想わせる暮らしができたなら理想的だ。世帯数より住宅数が上回っている時代に、実家や空き家の利活用などで家を2軒所有している人も多い。地球温暖化が進み、このまま都市部で生涯暮らし続けられるだろうか？と夏を迎えると真剣に考えている方もいるのではないだろうか。

一部屋投資型住居

また2軒の家を持たなくても、2地域を楽しむ

暮らし方があるように思う。数少ない事例ではあるが意外と考えたらありえることとして、独立し家庭を持った子供の家に、自分たち用に一部屋分だけ少し出資し確保するやりかただ。大事なことは部屋に水場を1つ付けることだ。歯磨きが出来、水が飲め、電気ポットへの給水ができればティタイムを楽しむには十分だ。電子レンジと小型冷蔵庫があれば中期滞在にはさらに完璧だ。一緒に住むとなれば覚悟もいり、実の親子であっても煩わしさもあるだろう。ましてや伴侶への遠慮も大きい。だが、いるときいないときがある一部屋同居であれば、双方にとって気楽だ。来てよし帰ってよしとこっそりつぶやかなくても、それぞれの独立性は確保できる。親にとっては必要時に使える部屋が我が家と別にあるということが、生活の幅を広げ旅先の宿とは全く違うくつろぎができることだろう。老人性うつ病が話題になる中、心の安定も得られるのではないかと思う。

住まい方様々

人それぞれの人生への取り組みがあり、家問題は一概に答えの出ないテーマではあるが、一度の人生を一つの地域しか知らずに過ごすのももったいないのではないかと思う。2拠点居住をいかに経済的にも効率よく実現するか。大きな家を持つのも憧れるが、身軽に各都市の良さをフットワークよく動ける小ぶりの流通しやすい物件で過ごすのも悪くはないだろう。

ただ海外にロングステイして10年目を迎える方を訪れ、毎日のゴルフざんまいにも拘わらず、今一つその地域に溶け込めていない様子などをお聞きすると、やっぱり日本の街がいいのかな？とも思うこの頃だ。

●西田恭子(にしだ きょうこ)プロフィール●

一級建築士。東京都出身。日本女子大学住居学科卒業後、大手ゼネコンを経て西田設計事務所開設。三井不動産リフォーム(株)にて住宅リフォーム設計に関わる。日本女子大学・文化学園非常勤講師。日本建築家協会会員。著書「中古マンション購入×リフォーム」「減築リフォームでゆうゆう快適生活」「リフォームで活躍する女性たち」など多数。